

# 平成 21 年度の漁況

道根 淳・寺門弘悦

## 1. まき網漁業

### (1) 漁獲量の経年変化

図 1 に 1960 年（昭和 35 年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化のグラフを示した。

2009 年の総漁獲量は約 7 万 9 千トンで、前年の 122%、平年（過去 5 ヶ年平均、以下同様）の 121%であった。これは近年漁獲の主体となっているマアジの漁況が好調で、主要浮魚類であるサバ類、カタクチイワシ、マイワシ、ウルメイワシも平年並み～平年を上回ったためである。2009 年の CPUE（1 ヶ統 1 航海当り漁獲量）は 38.4 トンで、前年・平年を上回った（前年の 116%、平年の 123%）。なお、2009 年の漁労体数は 12 ヶ統（県西部 4 ヶ統、県東部 8 ヶ統）であり、前年と変わっていない。

### (2) 魚種別漁獲状況

図 2～6 に島根県の中型まき網による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

#### ① マアジ

マアジは概ね周年好調な漁況が続いた。漁獲の主体は 1 歳魚（2008 年生まれ）で、夏季以降は 0 歳魚（2009 年生まれ）が漁獲に加入した。2009 年の漁獲量は約 3 万 3 千トンで、前年の 1.6 倍、平年の 1.1 倍であった。

#### ② サバ類

サバ類は主漁期にあたる 10 月にマサバ 0 歳魚（2009 年生まれ）を主体に平年を大きく上回る好漁があった。2009 年の漁獲量は約 1 万 8 千トンで、前年の 1.1 倍、平年の 1.5 倍となり、5 年連続で前年、平年を上回った。

#### ③ マイワシ

マイワシは県東部を主漁場として 7～10 月にかけて 0 歳魚（2009 年生まれ）を主体に平年の 5 倍となるまとまった漁獲が続いた。

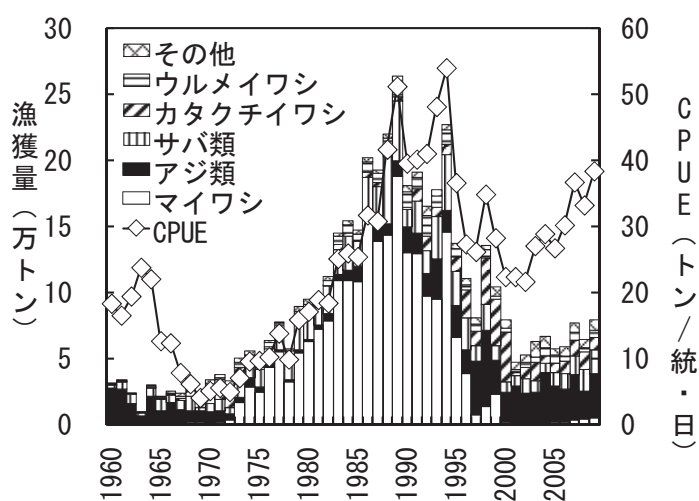


図 1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲量と CPUE の推移（2002 年までは農林統計値、2003 年以降は漁獲統計システム集計値）

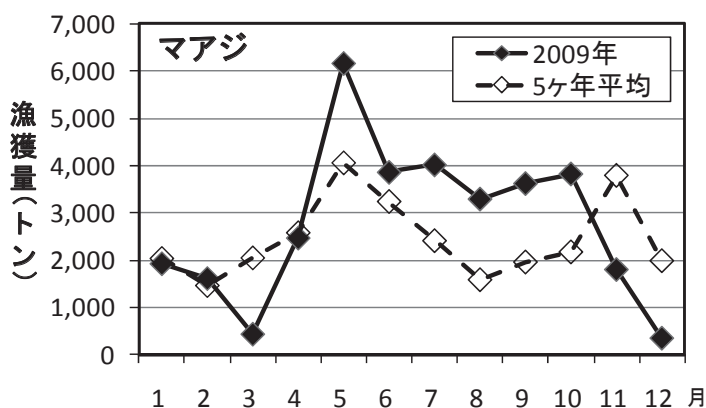


図 2 中型まき網によるマアジの漁獲量

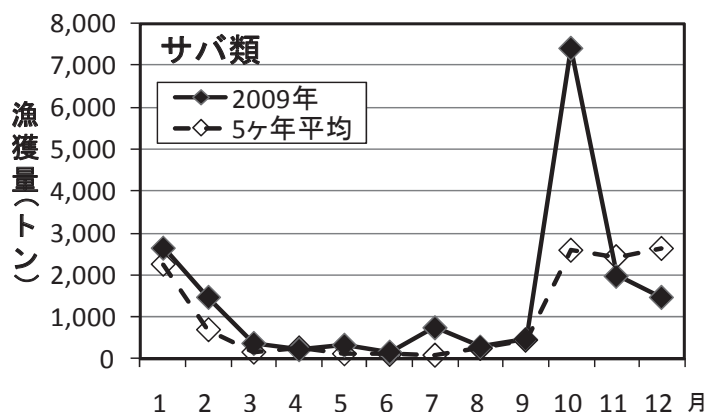


図 3 中型まき網によるサバ類の漁獲量

2009年の漁獲量は約5千トンで、前年の1.3倍、平年の2.3倍となり、7年連続で増加となった。本県のマイワシの漁獲量は近年増加傾向にあるものの、他の魚種に混じって漁獲されるに過ぎない。マイワシの資源水準は依然として低位であり、以前のような豊漁は当分見込めない状況にある。

④ カタクチイワシ

カタクチイワシは春季(3~4月)に県東部を主漁場として約8千トンとまとまった漁獲があったが、秋季の漁獲はほぼ皆無であった。2009年の漁獲量は約9千トンで、前年の0.7倍、平年の1.0倍と前年を下回り、平年並みであった。

⑤ ウルメイワシ

ウルメイワシは県東部を主漁場として3~4月の春漁と9~11月の秋漁でそれぞれまとまった漁獲があった。2009年の漁獲量は約5千6百トンで、前年の1.7倍、平年の1.1倍と好調であった。

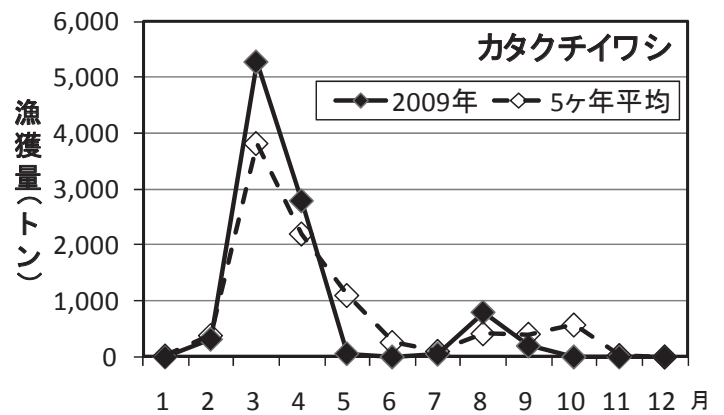


図5 中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量

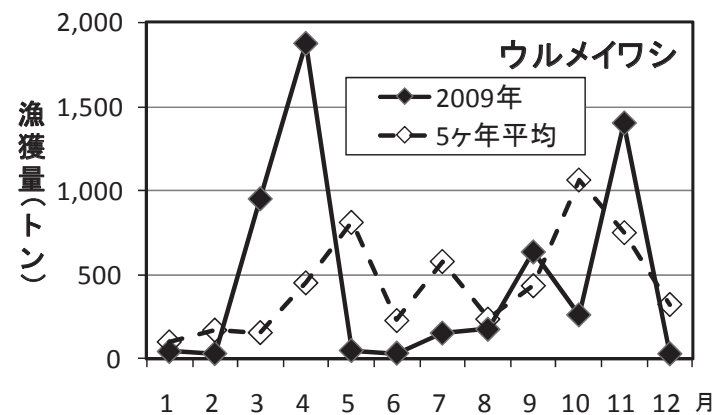


図6 中型まき網によるウルメイワシの漁獲量

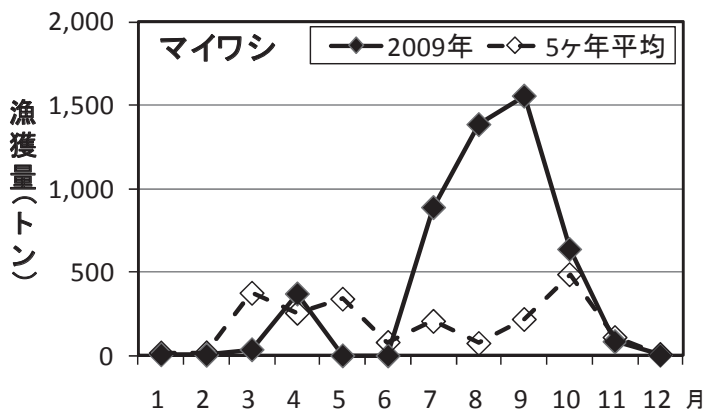


図4 中型まき網によるマイワシの漁獲量

## 2. いか釣り漁業

ここでは、いか釣り漁業（5 t 未満船）、小型いか釣り漁業（5 t 以上 30 t 未満船）及び中型いか釣り漁業（30 t 以上）によって浜田港に水揚げされたイカ類の漁獲動向をとりまとめた。

### （1）スルメイカ

浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量および水揚金額の年別動向を図 7 と図 8 に示した。2009 年の漁獲量は 79 トンで、前年（958 トン）の 8%、平年（883 トン）の 9%と前年・平年を大きく下回った。それに伴い水揚金額は 2891 万円に減少し、平年のわずか 8%であった。

図 9 に月別の漁獲動向を示した。例年、冬季～3 月は冬季発生系群の産卵南下群が、3 月～初夏は秋季発生群の索餌北上群が島根県沖での漁獲対象となるが、近年は韓国東岸の水温が高めで推移し、両系群の資源状態が良好であるにもかかわらず山陰沖への来遊量が少ない傾向にある。2009 年はこうした状況が強く、極端な不漁であった。

### （2）ケンサキイカ

浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲量および水揚金額の年別動向を図 10 と図 11 に示した。2009 年のケンサキイカの漁獲量は 861 トンで、前年・平年を上回った（前年の 1.4 倍、平年の 2.0 倍）。水揚金額は 5 億 8 千万円で、前年の 1.2 倍、平年の 1.5 倍であった。

図 12 に月別の漁獲動向を示した。近年、特に 2006 年以降春～夏に漁獲されるケンサキ型の漁況が不調である一方、秋に漁獲されるブドウイカ型の漁況は好調である。こうした傾向のとおり、2009 年は 8 月までは平年を下回る漁況であったが、9 月に漁獲量が急増し、それ以降平年を上回る漁況が続いた。

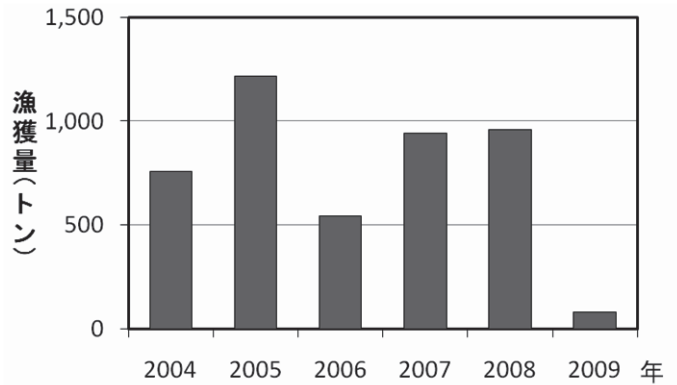


図 7 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量の動向

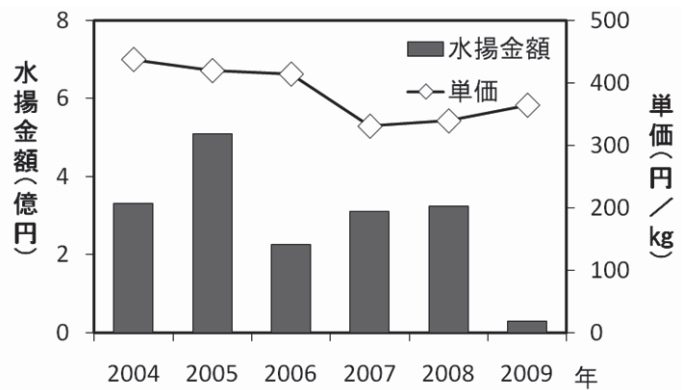


図 8 浜田港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の動向

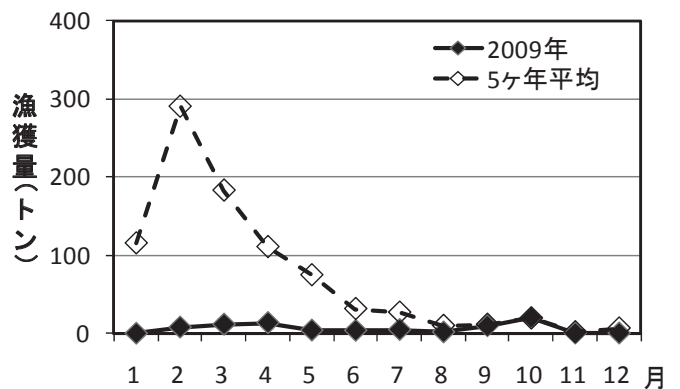


図 9 浜田港に水揚げされたスルメイカの月別漁獲動向

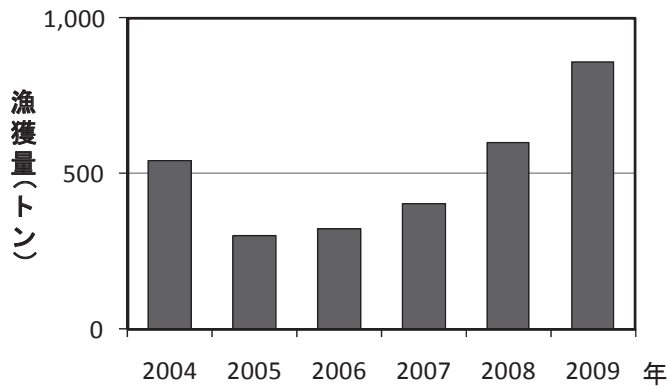


図 10 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲量の動向

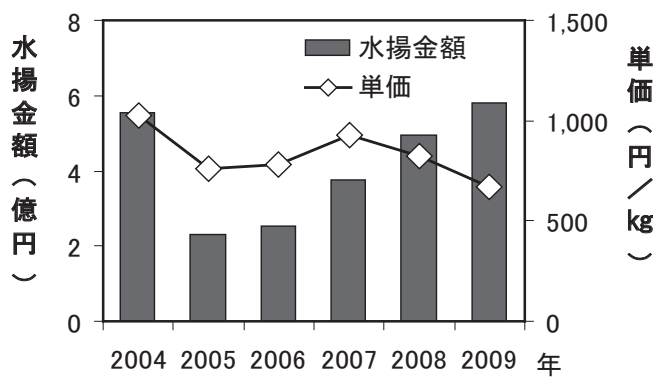


図 11 浜田港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の動向

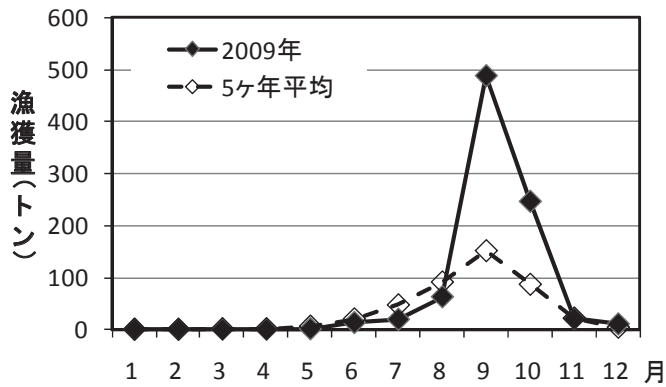


図 12 浜田港に水揚げされたケンサキイカの月別漁獲動向

### 3. 沖合底びき網漁業（2 そうびき）

本県では現在 8 ヶ統が操業を行っている。本報告では、このうち浜田港を基地とする 5 ヶ統を対象に取りまとめを行った。操業期間は 8 月 16 日から翌年 5 月 31 日までで、6 月 1 日から 8 月 15 日までは禁漁期間である。ここでは統計上、漁期年を用い、1 漁期を 8 月 16 日から翌年 5 月 31 日までとした。

#### （1）全体の漁獲動向

図 13 に 1986 年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（以下、浜田沖底という）における総漁獲量と 1 統当たり漁獲量（以下、CPUE という）の経年変化を示す。

総漁獲量は、1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて操業統数の減少により急激に減少したが、1993 年以降 3,000 トン台で安定して推移している。一方、CPUE は日韓新漁業協定が発効された 1998 年以降急増していたが、2006 年をピークに最近は減少傾向にある。

今漁期は休漁明け当初よりエチゼンクラゲの影響を受け、大量混入による破網、曳網時間の短縮など操業に支障をきたした。2009 年の浜田沖底の総漁獲量は 2,994 トン、CPUE は 599 トン/統で、前漁期を 8% 下回った。また、総水揚げ金額は 14 億 3,085 万円、1 統当たり水揚げ金額は 2 億 8,617 万円で、前漁期を 4% 下回った。

#### （2）主要魚種の漁獲動向

##### ①カレイ類

図 14 にカレイ類の CPUE の経年変化を示す。

ムシガレイは数年周期の増減を繰り返し、1993 年までは減少傾向にあったが、それ以降は増加傾向に転じた。2009 年の漁獲量は 442 トン、CPUE は 88 トン/統で、前年を 21% 下回ったが、平年（1999～2008 年の過去 10 カ年間の平均値、以下平年という）を 5% 上回った。

ソウハチは 1990 年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にあり、特に 2000 年以降は急減し、2003 年には 12 トン/統まで減少した。その後、2005 年以降は増加傾向に転じたが、2007 年を境に再び減少傾向にある。2009 年の

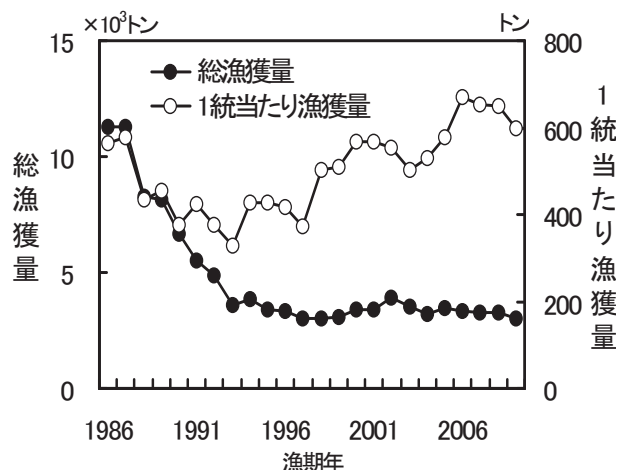


図 13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と 1 統当たり漁獲量の経年変化

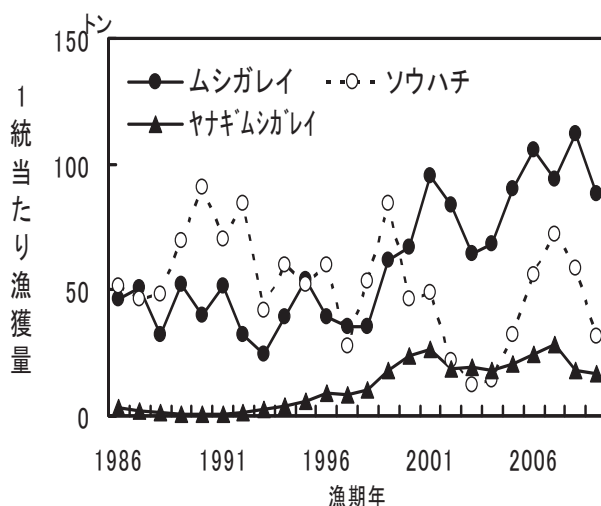


図 14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の 1 統当たり漁獲量の経年変化

漁獲量は 159 トン、CPUE は 32 トン/統で、前年を 46%、平年を 29% 下回った。

ヤナギムシガレイは 1991 年以降増加傾向にあったが、2001 年以降は横這い傾向にある。2009 年の漁獲量は 85 トン、CPUE は 17 トン/統で、前年を 5%、平年を 21% 下回った。

##### ②イカ類

図 15 にイカ類の CPUE の経年変化を示す。

ケンサキイカは数年周期で増減を繰り返している。近年では 2005 年に急減してからは低水準で推移していたが、最近では漸増傾向にある。2009 年の漁獲量は 180 トン、CPUE は 36 トン/統で前年を 6%、平年を 12% 下回った。一方、ヤリイカは 1980 年代後半より急激に減少し、近年は低位横這い傾向にある。2009 年

の漁獲量は16トン、CPUEは3トン/統で、前年を41%、平年を53%下回った。

### ③その他

図16に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

キダイは、1990年代は増加傾向にあったが、1998年以降年変動が大きくなり、2004年以降は減少傾向にある。2009年の漁獲量は201トン、CPUEは40トン/統で、前年を14%、平年を4%上回った。

アナゴは、1990年代前半にかけて横這い傾向にあったが、その後年変動が大きくなり、1999年以降は減少傾向にある。2009年の漁獲量は201トン、CPUEは40トン/統で、前年を14%、平年を4%上回った。

アンコウは、1990年代以降増加傾向にあったが、2007年より減少傾向に転じた。2009年の漁獲量は146トン、CPUEは29トン/統で、前年を15%、平年を25%下回った。

ニギスは、1990年代に入り周期的に大きな変動を示し、2005年以降減少傾向にある。2009年の漁獲量は104トン、CPUEは21トン/統で、前年を32%、平年を28%下回った。

アカムツは、1990年代後半以降、3回(1999～2000年、2006年、2008～2009年)急増した時期があり、長期的には増加傾向を示している。2009年の漁獲量は121トン、CPUEは24トン/統で、前年を19%、平年を49%上回った。今期は、小型サイズ(1歳魚)が好調に推移し、安定した水揚げがあった。小型魚の漁獲状況より、2年連続で卓越年級が発生したことが推測されるが本種は成長乱獲が顕著に認められており、卓越年級の発生が資源水準の回復に結びつきにくくなっている。

イボダイは、エチゼンクラゲの来遊に伴い漁獲量が増加する特徴があり、1990年代以降、その傾向が数回見られる。2009年の漁獲量は243トン、CPUEは48.7トン/統で、前年の8倍、平年の2倍の水揚げであり、過去最高の水揚げとなった。

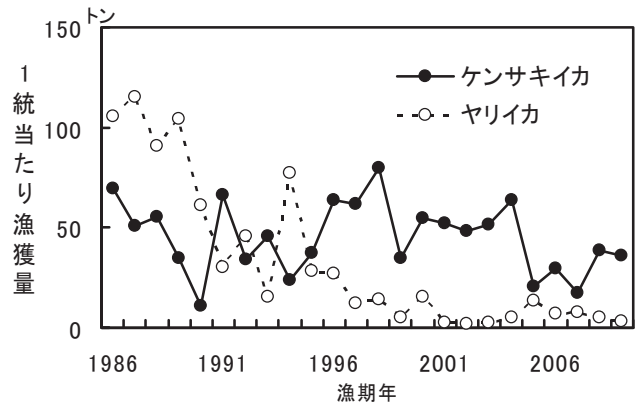


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化

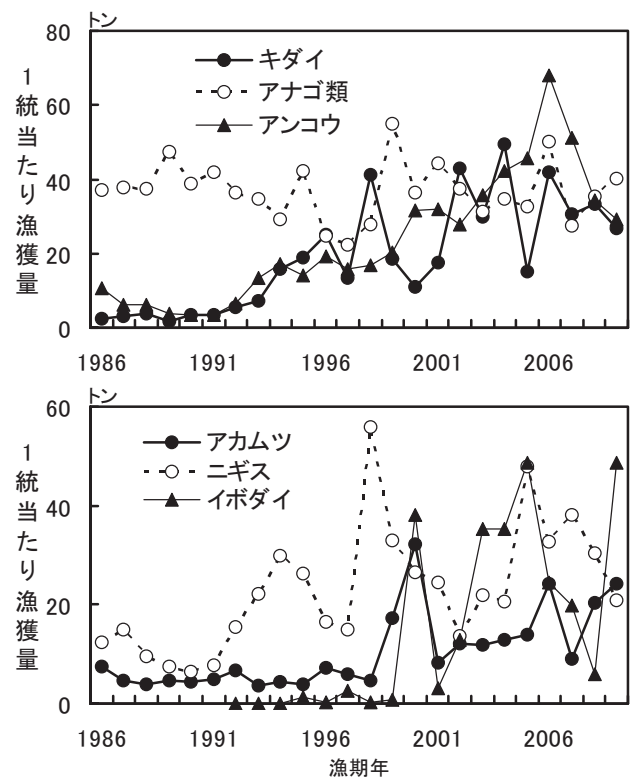


図16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要種の1統当たり漁獲量の経年変化

#### 4. 小型底びき網漁業第1種（かけまわし）

本漁業は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深100～200mの海域を漁場とし、現在56隻が操業を行なっている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである（6月1日から8月31日までは禁漁期間）。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。なお、ずわいがにかご漁業との兼業船ならびに漁期途中で操業を切り上げた2隻を除いた54隻分の集計とした。

##### （1）全体の漁獲動向

図17に小型底びき網漁業1種（以下、小底という）における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化を示す。

2009年の総漁獲量は5,422トン、総水揚げ金額は19億6,341万円であった。1隻当たり漁獲量は100トン、水揚げ金額は3,636万円で、平年（過去10年平均91トン、3,829万円）に比べ、漁獲量は11%上回ったが、水揚げ金額は5%下回った。1隻当たりの航海日数は131日で、前年、平年並みであった。沖底同様に、休漁期明け当初よりエチゼンクラゲの影響を受け、大量混入による破網、クラゲの排出に多大な時間を要することによる曳網回数の減少、クラゲとの接触による魚体の損傷、鮮度低下など操業だけの影響に留まらず、魚価への影響も見られた。

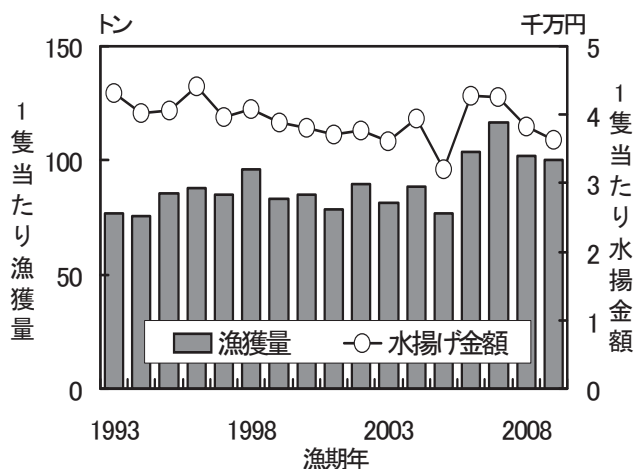


図17 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

##### （2）主要魚種の漁獲動向

###### ①カレイ類

図18にカレイ類の1隻当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは、沖底の傾向と異なり横這い傾向で推移している。2009年の漁獲量は250トン、CPUEは4.6トンで、平年を6%下回った。

ソウハチの漁獲量は沖底と同様な傾向を示し、1998年以降急減し、その後増加傾向にあったが、最近再び減少傾向にある。2009年の漁獲量は938トン、CPUEは17.4トンで、前年を28%、平年をわずかに下回った。

メイタガレイの漁獲量は41トン、CPUEは0.8トンで、前年を44%上回ったが、平年を42%下回った。

また、ヤナギムシガレイの2008年の漁獲量は62トン、CPUEは1.2トンで、前年を7%、平年34%下回った。

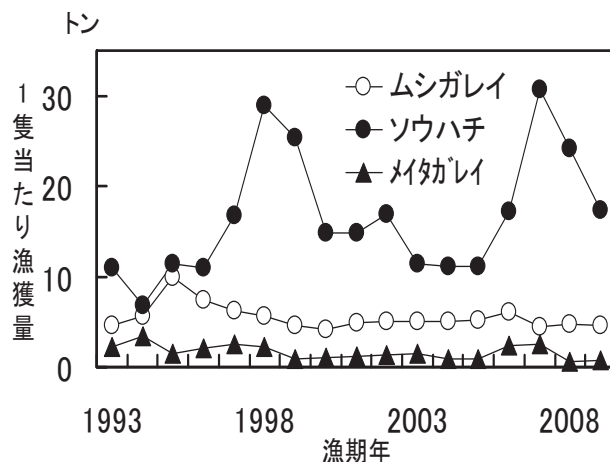


図18 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

###### ②イカ類

図19にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは、2000年代に入り大きな年変動を繰り返している。2009年の漁獲量は210トン、CPUEは3.9トンで、前年の1.7倍、平年の1.4倍の水揚げがあった。

一方、ヤリイカのCPUEは2001年までは1年おきに大きく好不漁を繰り返していた。2001年以降は年変動は小さくなったが、漁獲量の水準は低下している。2009年の漁獲量は

26 トン、CPUE は 0.5 トンで、前年の 25%、  
 平年の 30%の水揚げに留まり、1993 年以降最  
 低の水揚げとなった。

スルメイカの 2009 年の漁獲量は 138 トン、  
 CPUE は 2.6 トンで、前年を 2%上回ったが、  
 平年を 7%下回った。

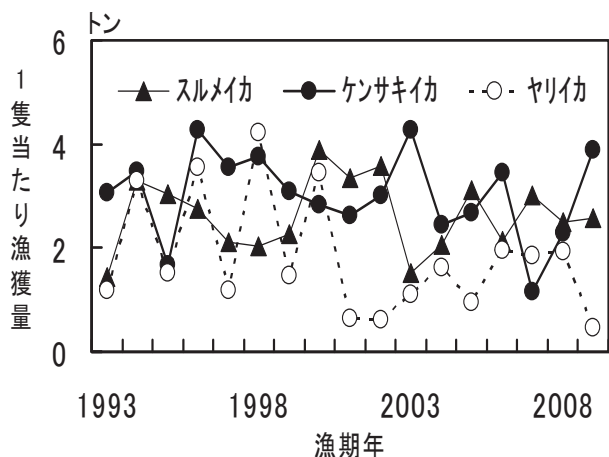


図19 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり  
 漁獲量の経年変化

### ③その他

図 20 に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類  
 以外の主要魚種の CPUE の経年変化を示す。

ニギスの CPUE は 1999 年に大きく落ち込ん  
 だが、それ以後は増加傾向を示している。2009  
 年の漁獲量は 775 トン、CPUE は 14.3 トンで、  
 前年を 6%下回ったが、平年を 34%上回った。

アンコウの 2009 年の漁獲量は 418 トン、  
 CPUE は 7.7 トンで、前年、平年をわずかに上  
 回った。アンコウの漁獲量は、1990 年代後半  
 より増加し 2007 年にピークを示したが、2008  
 年に大きく減少し、2009 年も頭打ちの状況に  
 ある。アンコウの漁獲量は沖底、小底ともピー  
 クを過ぎ、市場調査においても小型個体の  
 出荷数が減少していることから、今後の資源  
 動向が憂慮される。

比較的安定して推移しているアナゴ類の  
 2009 年の漁獲量は 156 トン、CPUE は 2.9 トン  
 で、前年の 2 倍の水揚げで、平年をわずかに  
 上回った。

増加傾向にあるアカムツの漁獲量は 206 ト  
 ン、CPUE は 3.8 トンで、前年の 1.4 倍、平年  
 の 1.8 倍の水揚げであった。沖底同様に小型

サイズ（呼称：メッキン）が、春季にまとま  
 って漁獲されたことが漁獲増の要因と考えら  
 れた。

キダイは沖底と同様に大きな年変動を示す。  
 2009 年の漁獲量は 219 トン、CPUE は 4.1 トン  
 で、前年を 19%、平年を 31%下回った。沖底  
 における漁獲動向も減少傾向にあるため、今  
 後の動向に注意が必要である。

ハタハタは年変動が大きく、近年は低水準  
 で推移している。2009 年の漁獲量は 8 トン、  
 CPUE は 0.2 トンで、前年、平年の 1 割程度  
 の水揚げに留まった。

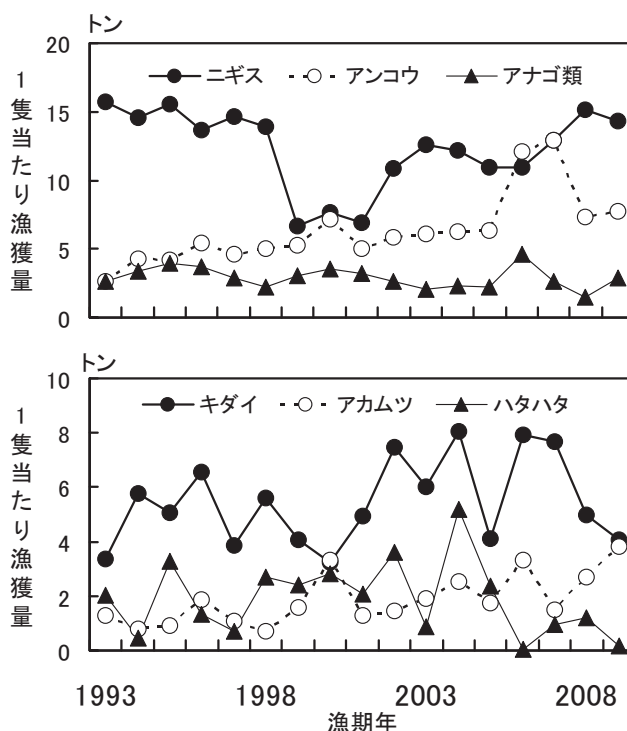


図20 小型底びき網漁業における主要魚種の1隻当たり  
 漁獲量の経年変化



## 5. ばいかご漁業

石見、出雲海域におけるばいかご漁業は小型底びき網漁業(第1種)休漁中の6~8月に、本県沖合の水深190~210m付近を利用して行われる。2009年は石見部5隻、出雲部1隻の計6隻が操業を行った。

解析に用いた資料は、JFしまねから入手した漁獲統計資料と各漁業者に依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用ならびにエッチュウバイの価格動向について検討を行った。また、資源生態調査として、JFしまね大田支所ならびに仁摩支所に水揚げされた漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、銘柄別漁獲量から本種の殻高組成を推定した。

### (1) 漁獲動向

2009年のバイかご漁業における総漁獲量は84.2トン、総水揚金額は3,458万円であった。また、1隻当たりの漁獲量は14.0トン、水揚金額は576万円であった。漁獲量、水揚金額ともに前年の6割程度の水揚げに留まり、平年に比べ、漁獲量で24%、水揚金額で40%下回った。

図21にエッチュウバイの1隻当たり漁獲量と水揚金額の推移を示す。漁獲量は、1990年代は横這い傾向にあったが、2000年代には年変動が大きくなり、減少傾向にある。一方、水揚金額は、1992年をピークに減少傾向にある。2009年のエッチュウバイの漁獲量は69

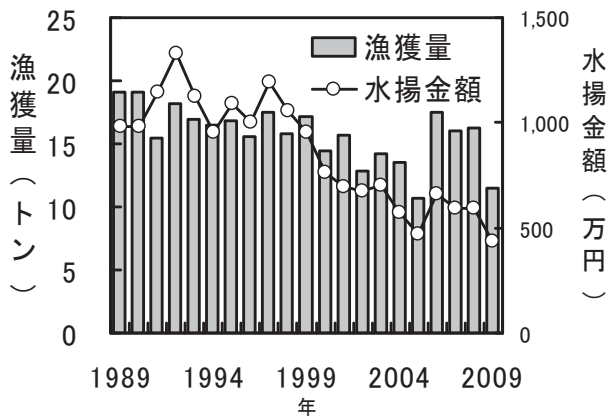


図21 ばいかご漁業におけるエッチュウバイの1隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

トン、水揚金額は2,628万円であり、1隻当たりの漁獲量は11.5トン、水揚金額は438万円であった。1隻当たりの量、金額は、平年(過去10年平均)に比べ、漁獲量では23%、水揚金額では34%下回り、低調な水揚げであった。

### (2) 資源動向

図22にエッチュウバイの1航海当たり漁獲量と漁獲個数の推移を示す。

2009年の1航海当たり漁獲量は385kgであり、平年を15%下回った。また、1航海当たり漁獲個数は7,395個であり、平年を27%下回った。1999年までは1.4万個前後で推移していたが、2000年以降、1万個を下回ることも多くなり、資源水準としては低い状態にあると推測される。

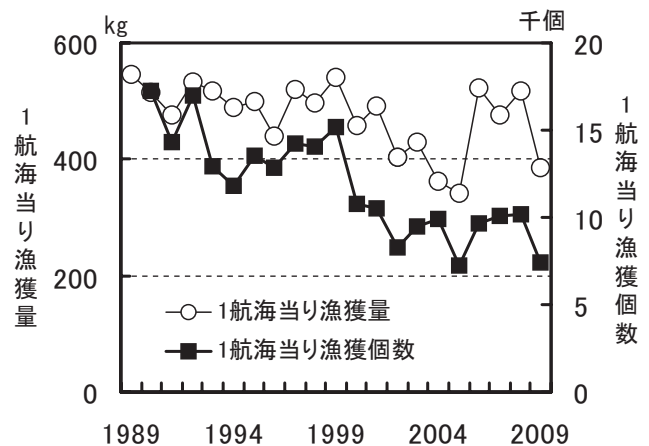


図22 ばいかご漁業におけるエッチュウバイの1航海当たり漁獲量と漁獲個数の推移

図23に出荷銘柄別漁獲割合の推移を示す。1993年は「中」銘柄が多く、「中」~「豆」銘柄で全体の7割弱を占めていた。2000年代に入り、「大」銘柄の割合が高まり、「中」銘柄の割合が低くなっていった。2009年は、「大」銘柄が50%を占め、次いで「中」、「大」銘柄となっている。近年では漁獲物の中心は大型貝が主体であり、小型貝の割合は減少傾向にある。

図24の体長組成の推移からも漁獲物の大型化の傾向が窺える。かつて、資源が良好であった頃には体長組成も二峰型であり、殻長

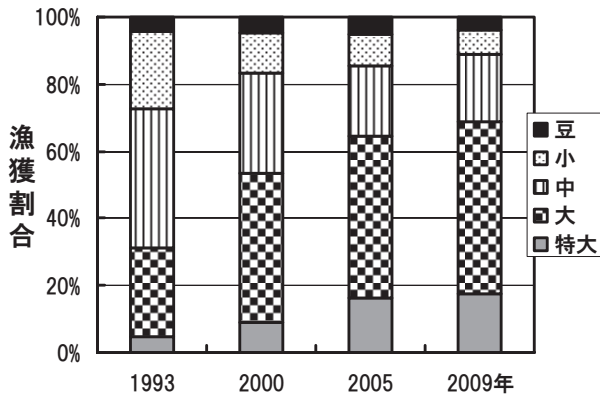


図 23 出荷銘柄別漁獲割合の推移

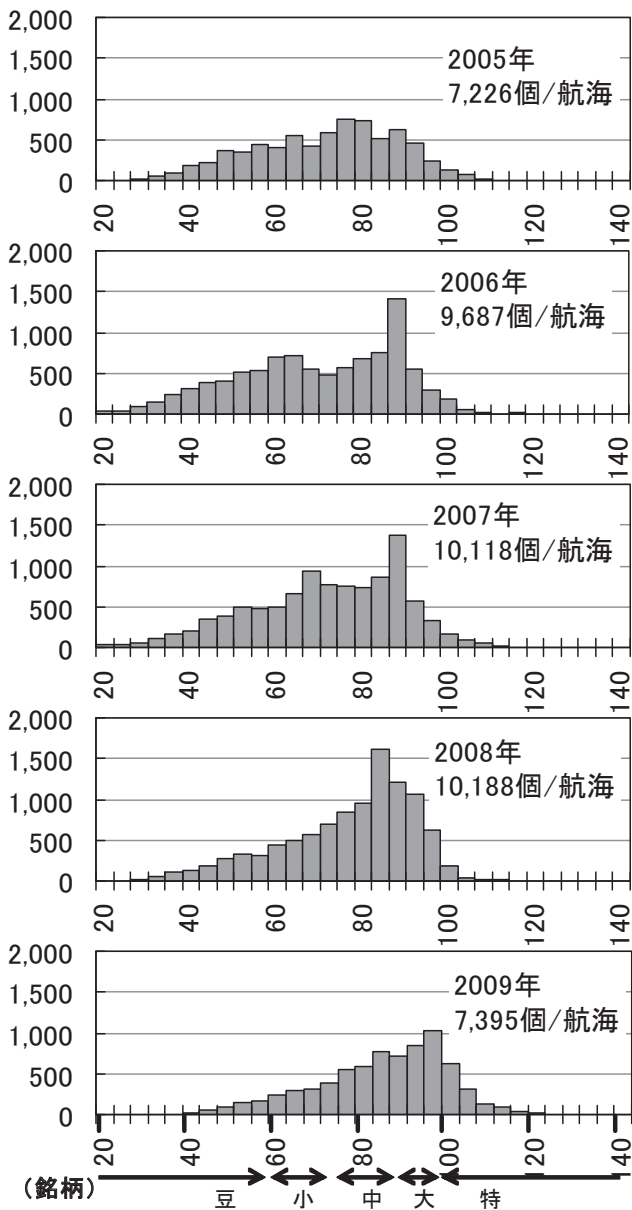


図 24 エッチュウバイの殻長組成の推移  
個数は1航海当たりの漁獲個数

60mm 前後にモードが見られた。しかし、2005 年以降の組成では、一部、二峰型を示す年も見られるが、2008 年、2009 年のように大きいサイズに偏った短峰型を示す年が多く、このことから漁獲物の主体が大型貝に移行していることが窺える。また、2009 年は殻長 80mm 以下の漁獲数が少なかったことも特徴的であった。

(3) 漁場

漁場は、例年と同じように日韓暫定水域の東側から日御碕沖にかけての水深 190~200 m であった (図 25)。日御碕沖では、昨年利用されていなかった漁場が今期は一部利用されていた。

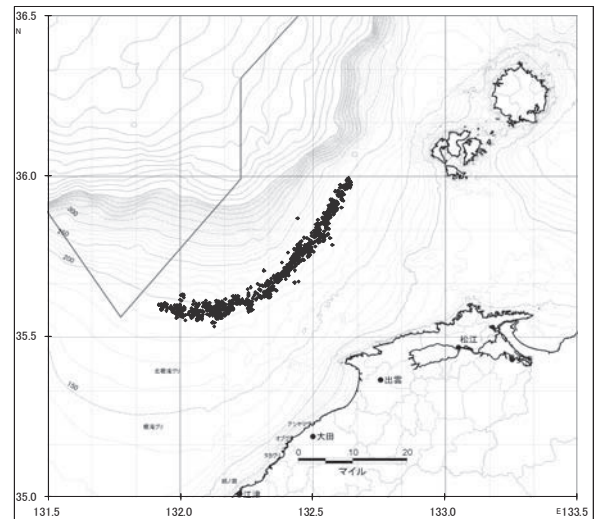


図 25 2009 年漁期に利用した漁場

(4) 魚価の推移

エッチュウバイの 1kg 当たりの平均価格は、石見部で 369 円、出雲部で 486 円であり、依然として魚価低迷の状況にある。石見部にお

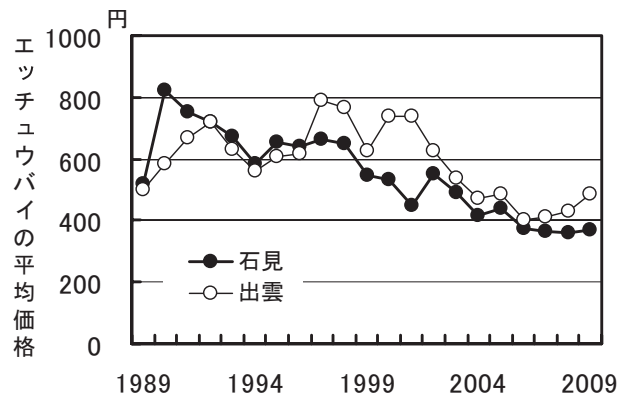


図 26 エッチュウバイの1kg 当たり平均価格の推移

いては、1990年以降、下落傾向にあり、近年は350～380円で横這い傾向にある(図26)。現状では1990年の半値以下で推移しており、魚価安は経営に大きな影響を及ぼしている。

銘柄別価格(図27)を見ると、石見部の各地区の価格には大きな差は見られなかったが、出雲部と比較したところ、全銘柄とも石見部各地区の価格と1.2～1.6倍の価格差があり、特に漁獲量の少ない「小」、「豆」銘柄ではその差がより大きくなっている。

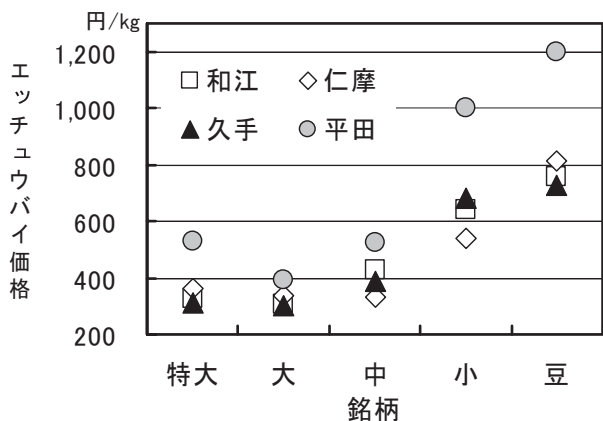


図27 エッチュウバイの地区別銘柄別kg当たり価格の動向

(5) 資源状態

今漁期の推定漁獲率は27.2%であり、前漁期を大きく下回った。漁獲の中心は4,5歳であり、次いで3,6歳の漁獲個数も比較的多い(図28)。2008年、2009年と2歳の漁獲個数が過去に比べ少ないため、今後の動向には注意が必要である。

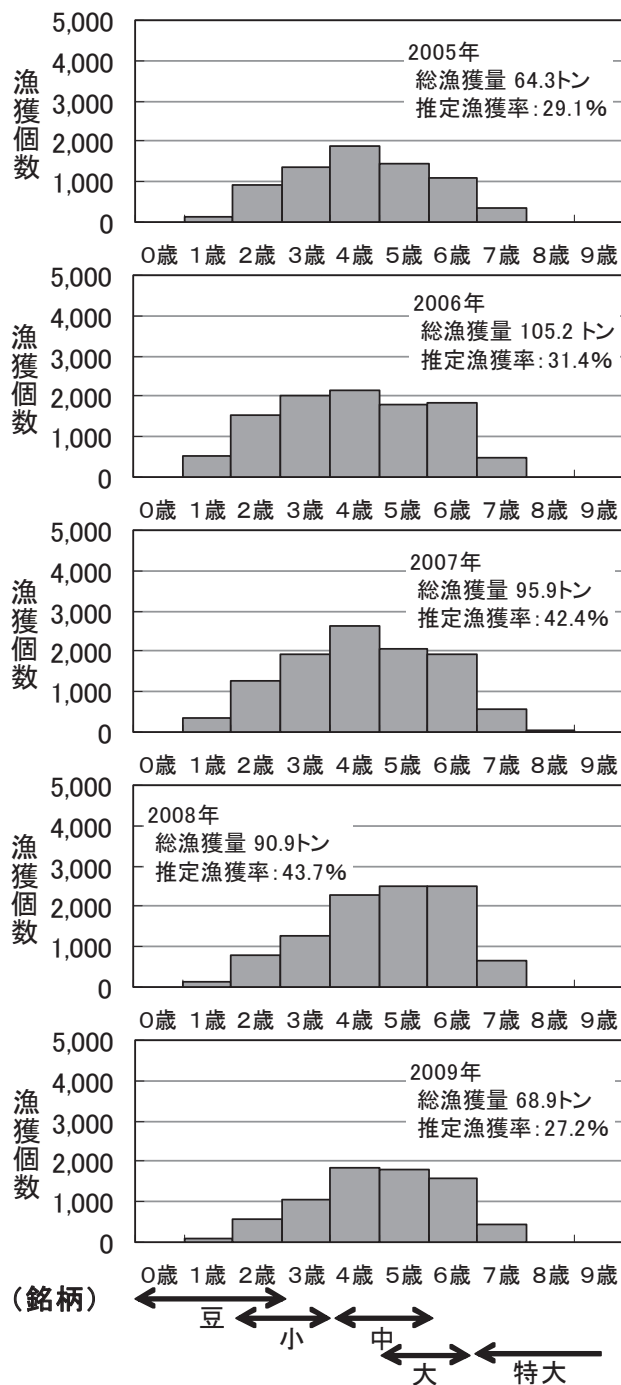


図28 漁獲物の年齢組成